

介護実習記録作成能力と日本語表現・教養ゼミナールの成績との関連性

—介護実習と教養科目の関連性—

岡本 真理子

1. はじめに

大学生の基礎学力が低下したことが問題視されてから久しい。

本来、大学は高等教育の府として、日本語能力をはじめとした基礎学力を兼ね備えた者のみが、入学を許される場所であった。

しかし近年、大学は全入時代を迎え、残念ながら一定の能力を満たさない学生が入学するという事態が出来ている。

特に、日本の大学で学業を修めるにあたって、日本語文章能力は必要不可欠なものであるが、その能力不足によって、レポートをうまく書けないという学生も多い。

そこで本学では、新入学生を対象に、入学前にスタートアップテストと称した国語と英語の能力テストを実施し、英語ではレベル別の学習をさせるとともに、日本語に関しては、初年時に教養必修科目の「教養ゼミナールA」(1年前期履修)、「教養ゼミナールB」(1年後期履修)において、リーディング・スキルやアカデミック・ライティングについて教授し、1年生のうちに小論文の正しい書き方や技術を習得できるように指導している。

そのほか、さらに基礎的な日本語を教える科目として「日本語表現」を開講している。この科目は、日本語の「読む」「書く」「聴く」「話す」能力を向上させることに重点を置き、日本語の豊かな語彙や表現力を身につけさせようとするものである。

具体的には、まず、毎回授業開始時に漢字検定の3級、準2級の問題を解かせ、80点以上を合格点に設定し、最終的には2級程度の漢字能力を身につけさせることを目標としている。さらに、故事・ことわざ・慣用句などが理解でき、かつ正しく使えるように、指導を行っている。また、文章そのものについては、句読点の的確な打ち方に始まって、明快な文章表現の仕方、乱れない正しい日本語の表現方法など、基本的ではあるが多岐にわたる内容について学ばせている。

一方、介護実習においては、他のいろいろな資格取得のための実習に比しても、毎日「文章」を書く機会が多い。特に介護実習記録は、何かを調べて書くというレポート的な記述以外に、利用者について自分が感じたこと

や、事実に基づく考察、分析を冷静・明確に区分して書き表すことが必要とされる。さらには施設の指導者とのコミュニケーション・ツールとして、またプレゼンテーション・ツールとしての役割もあり、実習目的に応じた幅広い種類の文章作成能力が必要になる。

さて、1年生が履修すべき教養科目の中で、介護実習記録作成にあたって必要な日本語表現能力を学んでいるはずなのであるが、実際には実習中にさらなる文章指導が必要な学生も多い。彼らはどのように上記の言語科目を履修したのであろうか。

最終的にはどのような指導を加えれば、介護実習記録の記載方法・技術を向上させることができるかについて明らかにすることを目的とするが、本稿では、まずその第一歩として、平成22年度入学総合福祉学科介護福祉コースの学生を例に取り、彼らが1年次に履修した「日本語表現」「教養ゼミナールA」「教養ゼミナールB」の成績が、総合福祉学科全体の中でどのような位置づけにあったのか、また介護実習の評価である「実習評価表」の言語表現部分ではどのような評価を施設側からもらってきたのか、さらには前述の日本語教育科目の成績との関連性はあるのかについて分析、考察を行いたい。

2. 介護実習の目的と日程

まず、介護実習とはいかなる内容、目的で行われているのかについて明らかにしておく。

むろん、厚生労働省管轄の国家資格「介護福祉士」を養成するための条件の一つとして、この実習が実施されるわけで、多少の解釈の違いによって介護福祉士養成校ごとに違いがあるもののおおかたは、全国同様の内容・期間で実施される。本学ではまず、2年生では第1段階としての「介護実習I-1」(1日9時間で、のべ17日間)、「介護実習I-2」(1日9時間で、のべ17日間)を行っている。

この介護実習の大きな目標は、1. 統合力、応用力の育成、2. 介護の視点、3. チームワーク(連携)のありかた、などを学び、身につけることである(注1)。つまり学内で学んだ知識と実習施設で学んだ技術とを統合し、利用者ごとに対応した介護実践へと応用していく

力を付け、他職種の方々との連携を通して、介護の大切さを学ぶ事である。

さらに3年次の「介護実習Ⅱ」では、「介護実習Ⅰ-1」、「介護実習Ⅰ-2」と内容的に重なり合いながらもレベルを高めていくという目標設定になっている(注2)。

昨年(平成23年度)、本学では2年生と3年生の介護実習を行った。そのうち2年生の介護コースに在籍する学生は12名で、これらの学生が「介護実習Ⅰ-1」および「介護実習Ⅰ-2」での実習を行った。

「介護実習Ⅰ-1」は平成23年9月、10月にグループホーム、デイサービス、障害者支援施設、救護施設、知的障害児施設に2、3名ずつ分かれて実習を行い、訪問介護については平成24年2月、3月に実施された。目的は、介護の現場について知る第一歩として、多様な介護現場を体験し、そこで多職種間での連携の取り方・必要性の実際や、利用者とのコミュニケーションを経験して、まずは机上の学問との差異を感じ、実学を学ぶことにある。

合計17日間の実習を各施設ごとに、3、4日間ずつほどに分けて行い、本学では1人5カ所の施設で実習を行うことになっている。そのため、「介護実習Ⅰ-1」では各自5冊の実習日誌ができあがることになる。

さらに「介護実習Ⅰ-2」は平成23年12月に、平日を中心に17日間実施された。実習先施設が1カ所であるので、冊子としては1冊であるものの、毎日行う実習日誌記載、毎週のカンファレンス記録や、「介護実習Ⅰ-2」の仕上げとしての個別援助計画書の作成と実施状況・評価の記載、その前提となるアセスメント表の記載など(注3)、おのずと「介護実習Ⅰ-1」に比べ、より高度で複雑な日本語表現能力が問われる。

3. 介護コースの学生の「日本語表現」の成績

さて、平成23年度に「介護実習Ⅰ-1」および「介護実習Ⅰ-2」を行った介護福祉コースの学生は、全員が平成22年度(大学1年次)に「日本語表現」の講義を受講していることがわかっている。

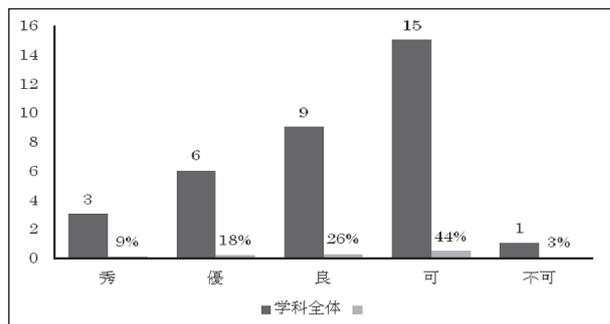
「日本語表現」は必修科目ではないので、必ずしも全学生が履修するわけではないが、介護福祉コースの学生については全員が履修しているため、まずは彼らの成績が学科内の履修者の中でどのような位置にあるかについて考察してみたい。

本学では、秀・優・良・可・不可で成績をつけており、「秀」=「90点以上かつ、各クラスで10%以下」、「優」=「80点以上」、「良」=「70点以上」、「可」=「60点以上」の点数評価を取ることが必要で、「不可」=「60

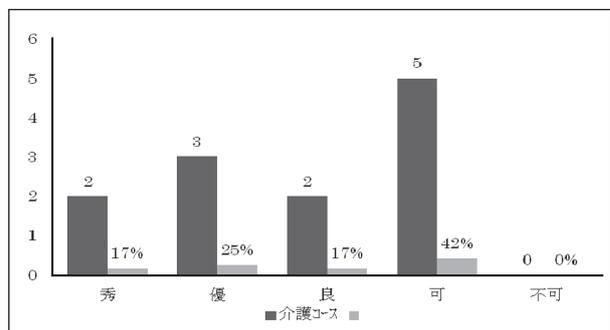
点未満」となっている。

「日本語表現」を履修した総合福祉学科の学生は34名で、学科全体では「秀」3名、「優」6名、「良」9名、「可」15名、「不可」1名であった。

【図-1】の様に、学科全体の成績は必ずしも正規分布になっていない。これは「日本語表現」の講義が、全学科の1年生すべてに履修が推奨される科目であるので、多数数の教員で教授せざるを得ず、成績評価の不公平をなくすよう、試験の素点で評価できるようになっているせいであろう。つまり、総合福祉学科は、教授する側の意図するレベルに達していない学生が多いとも言える。



【図-1】総合福祉学科全体の成績



【図-2】介護福祉コースの成績

さてこの中で、介護福祉コースの学生はといえば、「秀」2名、「優」3名、「良」2名、「可」5名、「不可」0名となっている。つまり【図-2】の様に、これまた正規分布にはなっていない。しかし、総合福祉学科全体の成績分布のグラフとは大きく異なり、成績の上位者(秀・優)と下位者(可)が多く、中位者(良)が少ないことが一目瞭然である。

つまり、【表-1】のように介護福祉コースの学生は「秀」、「優」の学生の割合を合わせると42%であり、学科全体の場合の27%と比べて、成績の良い学生が多い。しかし一方で「可」の学生の割合はそれぞれ42%と44%と大差なく、介護コースの学生は、成績上位と下位の者にと二極化していることがわかる。

	学科全体	割合	介護福祉コース	割合
秀	3	9%	2	17%
優	6	18%	3	25%
良	9	26%	2	17%
可	15	44%	5	42%
不可	1	3%	0	0%
合計人数	34	100%	12	100%

【表-1】「日本語表現」成績評価

4. 介護福祉コース学生の「教養ゼミナールA」の成績

介護福祉コースの学生が履修している文章作成能力を訓練できる科目といえるものの一つがこの「教養ゼミナールA」さらには「教養ゼミナールB」である。

「日本語表現」の講義では、主として日本語という言葉の基本、構文の基礎などを学ぶのに対し、二つの教養ゼミナールでは、それを応用することに主眼が置かれている。

「教養ゼミナールA」では、まずは大学生活を送るにあたって、大学で必要な心構えや技術を学ぶとともに、講義で要領よくノートをとることができたり、課題として与えられるレポートを書いたりできるようにすることが目標である。そこで、いわゆる「論理的な文章」を書く第一歩として、論述文を書くに当たってのテーマは各担当教員から与えられるものの、当該科目の修了時には1000字程度の論理的な文章が書けるようになることが求められる。

総合福祉学科の学生は3クラスに分けられ、それぞれ異なった教員が講義を担当しているため、学科の全体像として眺めたときにそれぞれの学生についての評価が必ずしも絶対的ではない。しかし、教員はおよそ成績が正規分布となるように評価することが求められており、学科ごとの学生の質やその他の条件によって、必ずしも正規分布とならないクラスもあるものの、「日本語表現」「教養ゼミナール」担当教員間で成績評価の透明性に努めていて、評価の正当性を覆すものではないと考えられる。

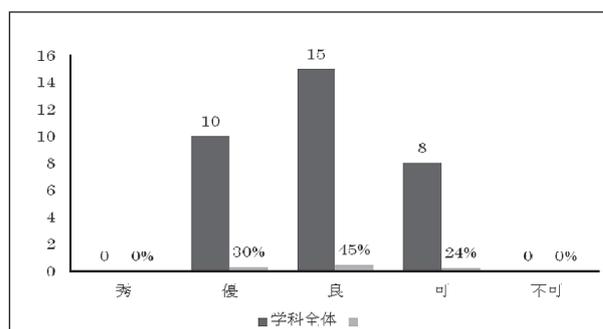
さてこの「教養ゼミナールA」を履修した総合福祉学科の学生は33名で、学科全体では「秀」0名、「優」10名、「良」15名、「可」8名、「不可」0名の評価であった。「教養ゼミナールA」は初年次教育の一つであり、必ずしも「書く」事だけを専一にして教授・評価しているわけではない。「聴くこと」「書くこと」はもちろん、それを言葉にして「表現」することまで内容が多岐にわたる。

この点、施設利用者や施設職員に対してあらゆる手段で自分の意志を「表現」したり、相手の意図をくみ取っ

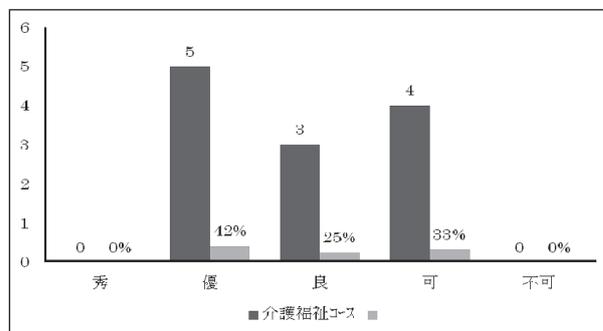
たりすることが求められる介護実習に赴く学生にとっては、特に重要な講義時間と言えよう。

さてこの「教養ゼミナールA」での介護福祉コースの学生の成績は特徴的なグラフを示す。総合福祉学科全体の成績が【図-3】のように、およそ正規分布を示すのに対して、介護福祉コースの学生の割合は【図-4】のように逆の様相を示す。しかし、母数が少ないために詳しく見てみると、【表-2】のように優・良・可の学生が5人、3人、4人と均衡していることがわかる。

つまり文章を書く初歩の能力を判断した場合、介護福祉コースの学生はまさしく平均的で、できる者もできない者も内在するといったところであろうか。



【図-3】総合福祉学科全体の成績



【図-4】介護福祉コースの成績

	学科全体	割合	介護福祉コース	割合
秀	0	0%	0	0%
優	10	30%	5	42%
良	15	45%	3	25%
可	8	24%	4	33%
不可	0	0%	0	0%
合計人数	33	100%	12	100%

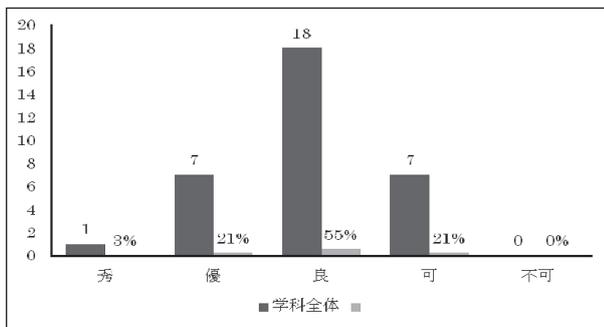
【表-2】「教養ゼミナールA」成績評価

5. 介護福祉コース学生の「教養ゼミナールB」の成績

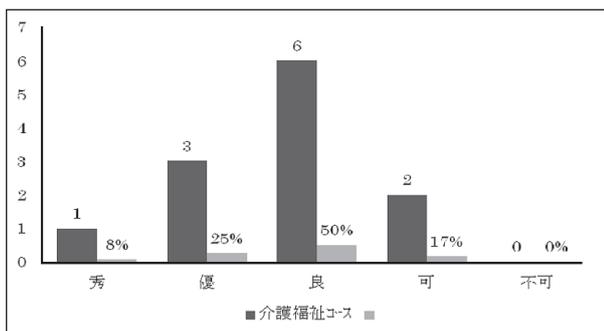
1年生後期に開講される「教養ゼミナールB」では、「教養ゼミナールA」に引き続き、さらに主体的にテーマや文献を探して論理的な文章を書くことが求められる。特に前期の「教養ゼミナールA」と違う点は、与えられたテーマではなく、自らが書くべきテーマを選択し、文献等も検索・利用して、より確かな小論文を2000字程度で書くことにある。

学生がもっとも悩むところは、まずはテーマ決めである。「教養ゼミナールA」では「・・・について書きなさい」という課題の与え方であったが、ここでは教員から「テーマは何でも良い」と言われる。ここで多くの学生が「何を書けば良いんですか」と聞いてくる。私はこのようなときには「自分の興味のあることや最近気になることは何か」と聞くことにしているが、「興味のあること」や「気になること」がないという学生が多く、これには閉口している（注4）。

さて、「教養ゼミナールA」では15回の講義の内、半分ほどを文章作成に当てることになっているが、「教養ゼミナールB」ではほぼ全回を使って文章作成に挑むことになっている。まずテーマ決め、資料を収集し、徐々に論文の形態へと昇華させていくために、試行錯誤を重ね、学生相互で発表を行うなどして、最終的に2000字ほどの小論文を作成してゆく。



【図-5】総合福祉学科全体の成績



【図-6】介護福祉コースの成績

この「教養ゼミナールB」の成績をグラフ化したものが【図-5】及び【図-6】である。総合福祉学科全体の成績、介護福祉コースの成績ともに、およそ正規分布を示していることがわかる。この結果は、母数の少なさによる誤差を考慮したとしても、明らかな正規分布と言えよう。【表-3】を見る限りに置いても、それは明らかである。

	学科全体		介護福祉コース	
秀	1	3%	1	8%
優	7	21%	3	25%
良	18	55%	6	50%
可	7	21%	2	17%
不可	0	0%	0	0%
合計人数	33	100%	12	100%

【表-3】「教養ゼミナールB」成績評価

さてここで気になるのは、「教養ゼミナールA」では優・良・可がほぼ同数だった介護福祉コースの学生の成績評価が「教養ゼミナールB」ではなぜ正規分布になっているのかと言うことである。

そこで、「教養ゼミナールA」よりも「教養ゼミナールB」の成績評価が上昇したか下降したか、あるいは変化がなかったかについて見てみると、【表-4】のようになった。

学科全体では全体の6割ほどの学生の成績評価に変化が見られていない。この中を、介護福祉コースと、それ以外の学生に分けてさらに見てみると、介護福祉コースの学生の4割ほどには成績変化がないが、それ以外のコースの学生については7割以上に成績変化が見られない。さらに注目すべきは成績が上昇した学生の割合で、全体では18%、介護福祉コース以外では10%であったものが、介護福祉コースの学生に限って言えば33%に上がることが明らかになった。成績が下降した学生もいるものの、成績評価「可」の学生が4人から2人へと減少していることから（【表-2】【表-3】参照）、成績の底上げがなされていることがわかる。

個々の学生の成績評価がどのように変化しているかについても明らかにしなければならないだろうが、これに関しての論究は別稿に譲ることとする。

	学科全体		介護福祉 コース		介護福祉 コース以外	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
上昇	6人	18%	4人	33%	2人	10%
変化なし	20人	61%	5人	42%	15人	71%
下降	7人	21%	3人	25%	4人	19%
合計人数	33人	100%	12人	100%	21人	100%

【表-4】「教養ゼミナールA」と「教養ゼミナールB」の成績比較

6. 「実習評価表」における言語表現部分の成績評価

ここまで、学生たちが1年次に履修する「日本語表現」、「教養ゼミナールA」（1年前期履修）、「教養ゼミナールB」（1年後期履修）の成績評価について論じてきたが、2年次から始まる介護実習の記録における言語部分評価との間に関連性はあるのであろうか。

先述のように、介護福祉コースの学生たちは平成23年度に「介護実習I-1」として5カ所の施設、「介護実習I-2」として1カ所の施設で実習を行っているが、「介護実習I-1」に関しては、各施設とも3、4日間の実習であるので、本稿では「介護実習I-2」の17日間で、学生たちがどのような実習日誌作成能力を發揮し、施設側指導者からどのような評価を受けたかについて、考察することにする。

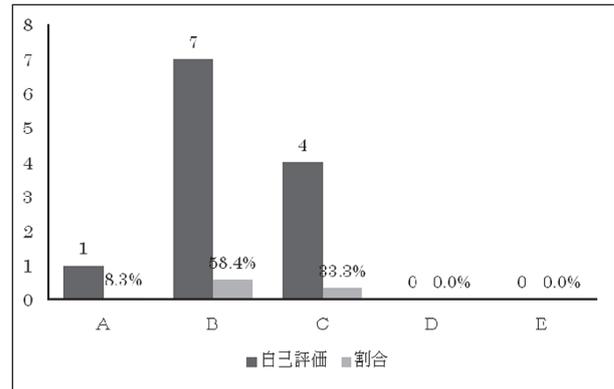
実際のところ、「実習評価表」の中にはっきりとした言語評価項目はないので、本学で使用している実習評価表の評価項目のうちの「実践の経過や結果、振り返りを客観的に正しく記録することができる」という項目に着目することにした。

各施設の实習指導者にお願ひした評価基準は「A」＝「良くできる」、「B」＝「ふつう」、「C」＝「やや劣る」、「D」＝「かなり努力を要する」、「E」＝「不可」である。

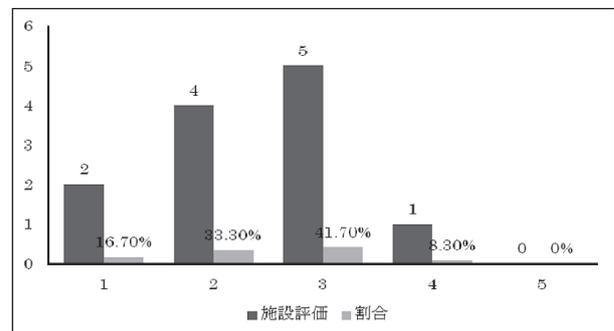
各施設の評価に関しては、全体的に高評価をつけて下さるところもあれば、厳しい評価をいただくところもあるので、必ずしも一律とみることはできないが、およそその学生の傾向を知るには十分であろう。

また、学生に対しても自己の実習内容について評価を付けることを課している。この評価に関しては、大学の担当教員が目を通すことにしているが、誰にとっても自己評価というものは難しく、学生も苦慮している様子が窺われる。

【図-7】【図-8】は、「介護実習I-2」の実習評価表の言語表現部分評価に記載された、自己評価と施設側評価である。施設側から頂いた評価も決して悪いものではないが、自己評価とはいささか異なった評価が見られる。



【図-7】実習自己評価



【図-8】実習施設評価

【表-5】からわかるように、学生からの自己評価は、自分を「B」＝「ふつう」とみなす者が多いが、施設評価では「ふつう」と「やや劣る」が多く、残念ながら「かなり努力を要する」という評価を受けられた者も1名おり、おおむね自己に甘い状況が窺われる。ただ、自分では「A」評価をつけるにははばかれるが、努力をしたので、「ふつう」という自己評価をしたという学生もいて、この「ふつう」自己評価への集中は、成績評価の構成そのものにも問題があったかもしれない（注5）。

	自己評価	割合	施設評価	割合
A (良くてできる)	1	8.3%	2	16.7%
B (ふつう)	7	58.4%	4	33.3%
C (やや劣る)	4	33.3%	5	41.7%
D (かなり努力を要する)	0	0.0%	1	8.3%
E (不可)	0	0.0%	0	0.0%
合計人数	12	100%	12	100%

【表-5】「介護実習Ⅰ-2」実習評価表の言語表現部分評価

7. まとめ

以上のように、平成23年度に「介護実習Ⅰ-2」を行った介護福祉コース学生が、1年次に履修した「日本語表現」、「教養セミナーA」、「教養セミナーB」の成績動向と、「実習評価表」の言語表現部分評価との関連性について、次のようなことが明らかになった。

① 介護福祉コース学生の「日本語表現」の成績評価は、総合福祉学科全体の成績評価に比べると、成績上位者と下位者との二極化されており、必ずしも言語能力の優秀な学生ばかりではない。

② 「教養セミナーA」に関して言えば、コースの12人の学生が優・良・可の評価部門にほぼ同数が並んでいる。

③ 「教養セミナーB」では、秀の学生から可の学生まで、正規分布に近く並んでいる。

④ 「教養セミナーA」と「教養セミナーB」の成績評価を比較・検討した結果、成績が上昇した学生の割合が、総合福祉学科全体では18%で、介護福祉コース以外では10%であったが、介護福祉コースの学生に限って言えば33%に上った。成績が下降した学生もコース内にいるものの、成績評価「可」の学生が4人から2人へと減少していることから、成績の底上げがなされていることが明らかである。この理由の考察については別稿に譲りたい。

⑤ 以上の分析をふまえて実習施設からの成績評価をみると、その成績曲線は下位成績者よりも上位成績者の方がやや多く、「教養セミナーB」の成績評価曲線に近いことがわかる。

このように、少なくとも今回分析した学生の成績に関しては、1年生前期に履修する「日本語表現」と「教養セミナーA」から、後期に履修する「教養セミナー

B」へと日本語に関する能力が着実に向上している様子が見え、その能力が介護実習での「介護実習記録」の記載に活かされていることが推測される。

今後は3年生での「介護実習Ⅱ」では、彼らの言語表現部分評価の成績がどのように変化していくのか注目しておきたい。

【注記】

(注1) 介護実習の大きな目標は、まず「1. 統合力、応用力」の育成で、学内で学んだ知識と、実習施設での介護実践で学んだ技術とを「統合」し、さらにこれらを利用者一人一人に対応した、個別の介護実践へと「応用」していくことである。次に「2. 介護の視点」を明確に持つことで、高齢者、障害者などに対して、その尊厳を保ちつつ、一人一人に適応した個別の「介護の視点」を持つことができるようにし、具体的な個別ケアの実態も学ぶ事である。最後に「3. チームワーク(連携)のありかた」、つまり利用者の生活支援のためには、多くの職種の人々との連携・協力が必須であることを学び、「チームアプローチ」の大切さを学ぶことである。

(注2) 本学のシラバスでは、「介護実習Ⅰ-1」の目標として(1)実習施設の機能と役割を理解すること。(2)施設職員の職種と役割、職種間の連携を理解する。とくに医療・看護との関係と連携を理解する。(3)利用者とのコミュニケーションを通して理解を深め、人間関係を築く。(4)基礎的、初歩的な日常生活における介護や援助について習得する。としている。さらに「介護実習Ⅰ-2」の目標として、(1)実習施設の機能と役割を理解する。(2)利用者の生活を観察し、コミュニケーションをとりながら情報収集を行う。(3)利用者の生活背景を理解するために、職員や家族、記録物からの情報収集を行う。(4)情報を分類、分析、解釈し、アセスメントする。(5)障害のレベルに応じて求められる介護の技術の適応と評価を行う。(6)施設職員の職種と役割、職種間の連携を理解する。(7)基礎的、初歩的な日常生活における介護や援助について習得する。をあげている。

(注3) 具体的には「介護実習Ⅰ-2」で、学生が用意あるいは記載するものは次の通りである。(1)実習個人票、(2)誓約書、(3)事前訪問報告書、(4)施設概要、(5)学生出席表、(6)介護実習日誌(実習日数分の枚数)、(7)受け持ちケースフェイスシート、(8)情報の整理分類アセスメント表-1、(9)アセスメント表-2、(10)ICFに基づいた介護過程情報シート、

(11) 個別援助計画、(12) 受け持ち利用者ケア記録-1 実施前、(13) 受け持ち利用者ケア記録-2 実施前、(14) 受け持ち利用者ケア実施記録、(15) プロセスレコード-1、(16) プロセスレコード-2、(17) カンファレンス記録用紙、(18) レポート用紙、(19) 実習評価表、(20) 介護実習経験項目チェック表、(21) 実習のまとめ、(22) 欠席届、(23) 宿泊及び食事申込書。以上を本学では用意し、介護実習を行っている。このうち初段階での実習では、(1) (3) (4) あたりから、すでにうまく記述できない学生もいるが、「介護実習 I-2」段階ともなると、多くの学生を悩ませるのが (6) から (17) および (21) である。特に (7) から (16) については「介護実習 I-2」で初めて経験するもので、複数枚にわたるものも多い。

(注4) 学生のこのような傾向は、授業の一回目に自己紹介をさせたときに、顕著に表れる。つまり、「趣味」か「最近夢中になっていること」など何でも良いので言ってくださいと言うと、「特にありません」と言う学生が、最近、頻りに増えてきた。このような無気力な学生については、もっと1年次に学問、仕

事、人生など多岐にわたる意義付け、動機付けが必要であろう。文章を書くという事以前に、何事に付けても「考える」ことについて、もっと学ばせるべきかもしれない。

(注5) 本学の実習評価表成績においては評価段階がA～Eの5段階となっているが、実際には不可を除けば4段階で評価を行う方式である。「ふつう」より上は1つしか評価がないが、下は不可のE評価を除いても、2つある。「ふつう」よりは良いが最高評価ではない学生の評価を、学生同様、施設の方も評価しづらかったのではないだろうか。今後の反省として、「ふつう」より上と下の評価を同じ2段階、あるいは1段階にしたほうが、より評価しやすいものとなるかもしれない。

※本稿の一部は平成24年5月本学実習教育センター発行の『平成23年度東海学院大学実習教育センター年報第3号』に発表したものである。